

きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

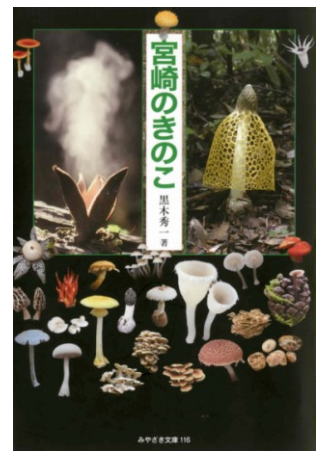
最近ではウェブで容易に書評情報のはいった本の情報が入手できるようになりましたが、今回も、こりずに私の手元に届いた菌類関連の本を発行順に紹介します。

「宮崎のきのこ」 (みやざき文庫 116)

著者：黒木秀一，発行所：鈺脈社，2015年9月17日発行，247頁，ISBN：978-4-86061-596-3，2000円（＋税）

この本はすごい。きのこ好きならよく知っている種類から珍しいものまで、淡々と図鑑らしく、それぞれの種類の解説がかかっている。しかしその内容は読んでびっくり。どこにも書かれてないような情報が満載なのである。地元新聞に2005年から2008年に掲載されたものに加筆・修正されたものとのこと。なるほど1種ごとの説明が丁寧でよみやすい。また、宮崎にこだわり地元の利用法の聞き取りも多い。当然、宮崎のきのこの地方名(方言)もふんだんに掲載されている。生物名の方言は、えてして羅列になり、本に掲載されたものに無味乾燥なものになりがちである。しかし本書では、地元密着型の詳細解説がその方言に伴っており、ふむふむと紹介された利用法や地元のつきあい方などを読んでいくと、つい、その方言でつぶやいてしまっている自分に気づく。地方名でよばれる、そのきのこの背景が、いきいきと立ち上がってくるのである。

民俗的な記述がもりだくさん。たまたま開いた頁で紹介すると、例えばオオキツネタケ(162頁)。スネナガとよばれ食用とされていたこと、その地方名のきのこの正体を三年がかりでつきとめたこと、食用とされる地域は、実は県外からの移住された方の多い地域だったこと、などが紹介されている。奥が深い。ショウロ(165頁)、カキシメジ(183頁)、ムキタケ(198頁)。みな話が面白い。メシマコブ(128頁)は、地元の猟師が猟犬の体調がわるいときに煎じ汁をえさと一緒にたべさせる特効薬だったのだという。おどろくべき情報。英文の学術誌に掲載してもよい記事となるだろう。民俗的な記述は、さらに最後にまとめて登場し(218頁から)、これが面白い。ホクチ、ケヤキのホタ、ハウロクタケと蜜蜂、ハエとテングタケ。イボテングタケのハエ捕り効果を実験する場面



もある。地元料理の記述も盛りだくさん。食用きのこの料理への関心も半端ではない。

著者の理系の観察眼も見事である。例えばキリノミタケ(139頁)がつくる偽菌核の話。よんで頂くしかないのだが、珍菌とされていたキリノミタケの発生環境や生活史を考察し、地形図からキリノミタケの発生する場所がわかるのだという(本には書いてないけど本人から聞いた話です)。また、アヤヒカリタケ(仮称, 119頁)。胞子が発光する, というのもすごいが, この胞子が発光する様子を, 柄に付着する粘液の発光写真(粘液に胞子が付着する), きこの周りの朽ち木が発光する写真(胞子が散布される)で紹介し, 最後に, 胞子紋が光っている写真があらわれる。それぞれに写真が見事である。

きのこの地方図鑑といえは, かつては, ネタ本となる本郷図鑑や類書を広げ, ついでに地方臭をちょっと足したようなものも多かったのだが, この黒木さんの本はオリジナル記述満載。これからの地方図鑑の手本となるような見事な本となっている。

「春夏秋冬 街のきのこ散歩」

著者:大舘一夫, 発行所:八坂書房, 2015年9月25日発行, 160頁, ISBN:978-4-89694-194-4, 1600円(+税)

春からはじまり, 街のさまざまな環境でみられるきのこを, 沢山の写真などで紹介する街のきのこシリーズの続編。著者は, ひとが気づかない意外に身近なところで, いまでも子実体を発生させ続けているきのこの語り部となり, きこのへのアプローチを季節にそって教えてくれる。きのこばかりでなく, 一緒にきのこ狩りをする仲間への深い愛情も感じることができる。ところどころに, きこのを見分けるポイント(裂ける・裂けない, ヒダの様子, 菌根共生など)の説明もはいつており, きこの観察の入門ともなる。各項に, 「ここを探そう」という指針もあり, 街のきのこ観察ガイドブックにもなっている。評者の友人は「がっかりポルチャーニ」と言った, ホオベニシロアシグチだが, 著者は「湯がいてスライスしたものを氷の上に並べ, 山葵醤油で味わうきのこのお刺身風は絶品である」(100頁)と紹介している。著者の食べて味わうきのこの愛がよく伝わる。



「くらべてわかる きのこ」

写真:大作晃一, 監修:吹春俊光, 発行所:山と溪谷社, 2015年9月25日発行, 144頁, ISBN:978-4-635-06348-7, 1800円(+税)

本書は「くらべてわかる」シリーズ. だから検索や見分け方に主眼をおいた図鑑とならなければならない. しかしきのこで検索表をつくるのは困難. どうしたか. 本書は「見わけのツボ」(6-23頁)という新機軸を採用. 図入り用語解説というか, 絵入り検索表というか, くらべて見分ける方法について, 傘の表・裏, つば・柄・つばなど, 大作さんの鮮明な写真をもとに, 種の特徴がハッキリ比較できるよう, 大部の頁をさいて, 見分け方のツボを紹介している. テキストの執筆は, 山と溪谷社の看板商品『日本のきのこ』増補改訂版の編集とりまとめ役, また『きのこワンダーランド』(山と溪谷社)や『きのこの下には死体が眠る!?!』(技術評論社)の編集をつとめた辣腕編集者の山田智子さんです.



「きのこの世界はなぞだらけ」 (このは No. 11)

発行所: (株) 文一総合出版, 2015年10月15日発行, 96頁,
ISBN: 978-4-8299-7390-5, 1800円 (+税)

科博の保坂健太郎さんが全面バックアップでつくったムック本. 表紙の写真は, 大作晃一さんの写真なので前著とそこはかたなくデザインが似ている. でも, 中をあけると, わかりやすいきのこ総合入門書となっており, きのこの暮らしぶりから分類まで, 多様な手ほどきを受けることができる. 見所は, 例えば, 写真として多く登場する大作さんと新井文彦さんの写真. 二人の作風がぜんぜんちがうので, そこを鑑賞するというのも本書の楽しみ方のひとつ. 最後に, 「きのこにあつまる虫」が6頁にわたって紹介されているのも類書にない特徴のひとつ. 本書は, コケ, 骨, 冬鳥, フクロウ, 紅葉など, 自然をよみとく「生きもの好きの自然ガイド このは」シリーズの1冊. どれも良書なので末永くつづいてほしいです.



「生物界をつくった微生物」

著者: ニコラス・マネー, 翻訳: 小川眞, 発行所: 築地書館(株), 2015年11月20日発行, 427頁, ISBN:
978-4-7562-4405-5, 2300円 (+税)

DNA を利用した分子生物学は, 生物の分類学を根本から改変した. 目に見えないということで, 視野の隅におかれていた細菌や古細菌などの微生物は, 実は, 地球の歴史のなかで, 長い時間を地球とともに経てきた古参の地球の住人で, 現在でも最も多様な生物だったのである. 本書は, その「微生物」を, 過去の生物学をふりかえりながら, 身近な対象を利用して紹介していく.

すばらしいのは, 著者の視点である. 第一章エデン, 冒頭の部分(9-10頁)は著者の書斎からみるなにげない緑に満ち



た風景の背景を解説してくれる。「私が住んでいる場所はこの惑星同様、およそ五十億年の歳月を経ている。」からはじまる、いくつかのパラグラフの視点の、なんと俯瞰的なこと。小学校や中学校の理科教育で、郷土の歴史を、このような視点で先生に繰り返し語ってもらうことができれば、かならずや豊穡な自然観をもつ日本人をたくさん育むことができるだろう。生物学は、遺伝や細胞構造等ミクロの視点を教える教科となってしまうが、このような俯瞰的な視点をもたらしてくれる素晴らしい学問でもあるのだ。

このあとの15頁以降の1章は、最初は読まなくてよい。よくわからなくなるから。2章以降の各論から好きなところを読んでいったらよい。2章は、英国人で顕微鏡をつかって様々な発見をしたロバート・フック、オランダ人で虫眼鏡のような顕微鏡で様々な大発見をしたレーウエンフックの物語。それから海、土と水、大気圏の微生物と続く。また第6章は腸内細菌の話であり、身近なのでここからはじめてもよい。抗生物質が腸内細菌叢にあたえる影響、胎児がどのように体をまもる微生物を獲得するか、ゴリラとヒトの腸内細菌叢は似ているのか、などなど。評者が思うに、コンビニなどで販売される様々な食品。微生物の活動を抑える物質がまんべんなく入っているはずだが（コンビニの弁当はなかなか腐らない）、我々の腸内細菌叢は、いったい今では、どうなっているのだろうか。

読んでいて思うのだが、科学の最新情報や論文は、ほぼすべて英語で記述されており、英語圏の人たちは、膨大な情報を普通のスピードで入手することができる。おそらく普通の教育をうけた日本人とはまったく異なる環境なのだと思う。これまでのニコラスさんの本は、菌類を対象にしてきたけど、それとは異なる分野の話題で、やや未消化のところもあるようだが、それでも話題豊富の本です。せっかく翻訳していただいたこともあり、内容は多様豊穡なので、ゆっくりと読んでいってください。

「菌世界紀行-誰も知らないきのこを追って」 (岩波科学ライブラリー245)

著者：星野保，発行所：岩波書店，2015年12月4日発行，132頁，ISBN：978-4-00-029645-8，1300円（+税）

学会などの講演を聴いても著者の話はおもしろい。著者はサービス精神に溢れている人なのかも。本書は雪腐病菌を追って、欧州から広大なロシア、そして南極を調査した記録である。その成果は、コンパクトにまとめられた図（84-85頁）に要約されているが、本書の全編をおおう話は、調査の際の



“でこぼこ話”である。目的の菌を見つけたときの感動の表現が、それぞれによい。おもしろいので一気によめてしまう。印象深いのは、各章の最初に各国の風景切手が紹介されているが、その風景についてのコメントがすごい。ちっちゃな切手の絵から、よくそこまで言いますね、というような読み解きがなされている。この切手解説からだけでも、マニアな著者が雪腐病菌に捧げるきもちが良く伝わるものとなっている。

「マイコフィリア」

著者：ユーヅニア・ボーン，翻訳：佐藤幸治・田中涼子，監修：吹春俊光，発行所：(株)パイインターナショナル，2016年1月27日発行，427頁，ISBN：978-4-7562-4405-5，2300円（＋税）

食べ物としてのきのこに関心のあった主婦が、野生のきのこ狩りに参加したことがきっかけで、野生のきのこの魅力にとりつかれ、きのこのあらゆる側面を、様々な会に参加しながら、きのこの自然誌について、お遍路さんのように尋ねまわり、学習し、最後にはニューヨーク菌学会の会長になってしまった、というお話である。内容は具体的で面白く、著者と一緒に学んでいくと、最後には、生物としてのきのこ、生態系における菌類の役割、エンドファイトや菌根菌類等の偉さなどがわかり、最後までよめば、菌類が地球上の生態系に不可欠な役割を果たしていることが、おのずと得心できるしかけになっている。

わたしがもっとも感心したのは、著者がマジックマッシュルームを経験した場面（翻訳370頁）。「私は山の上で、自覚や他覚についてたくさんの啓示を得ました。それを同年代の女性読者のみなさんにもお教えしましょう。私は年をとることに罪悪感を抱かなくなり、外見が衰えることを残念に思わなくなりました。体は単なる入れ物で、人生を旅する船のようなもの。きちんと動いていれば美しく、ありがたいものだと気づいたのです。私は心から安堵して、その気持ちは今でもつづいています」。私（評者）は違法になる前の催幻覚性きのこを知る世代だが、このように美しくリアルに催幻覚性きのこを語ったひとを私は知らない。

本書の背景をすこし述べると、私が2013年春「房総のむら」に勤務していたときに出版社から監修の打診があり、ひきうけたものの、元の本は、平易な英語でかかっているようで、読んでみるとわかるが、とても難しい。また翻訳の担当もなかなか決まらなかった。そして、私が2014年5月「きのこマイスター」という資格者の集まりが長野県であり、そこで今回全て翻訳された佐藤幸治さんに初対面でお会いしたのであ



る。「実はこんな本を翻訳したのですが・・・」と見せていただいたのが本書。びっくりして出版社に相談し、それからいろいろあって完成したものである。原文の本は著名通販会社からとても安価・迅速に入手できる。佐藤さんは工学系の方で、生物系の訳語については、すべて私の責任です。日本語になってとても読みやすく、菌類のこと、特に生態系での役割などがよくわかるようになるし、表紙がうつくしい。よい本だとおもいます。

「世界のかawaii きのごデザイン - 紙ものきのご図案帳」

著者：飯沢耕太郎・北川公子，発行所：DU BOOKS，2016年2月1日発行，112頁，ISBN：978-4-907583-61-3，1800円（+税）

なんと、この表紙にも、大作さんの写真がつかわれている。タイトルが「かawaii」なのだが、冒頭から、きのご缶詰ラベル、駅弁包装紙、シガレットラベルなどではじまる。渋い。その次が、松茸狩り文化。江戸の書籍、戦前の地方鉄道会社がつくった松茸狩パンフレット等々で、きのご文化にアプローチし、鉄道文化やきのご文化を読み解く。これまで誰も気がつかなかった視点だろう。しかも1点や2点の紹介でなく、怒濤の収集物が元になっている。それによって、戦前に存在していた松茸狩文化はおろか、地方の植生環境までを再現しているところが、ほんとうにえらい。蒐集のもつパワーである。その他、お約束の文具類や切手なども、もれなく並んでいるのだが、面白いところは、レコードジャケット（CDじゃなく塩ビのレコード）。かつて、幻覚きのご等を包含する文化が最先端だった時代があったことを、レコードジャケットによって物語らせるのである。その紙モノをつくらせた背後の文化を、紙モノに語らせるところがよい。そして頁をめくると、最後のパートに登場するのがリービッチのカードコレクション。わたしは全く知らなかったのだが、食品を買うとおまけでついてきたカードなのだという。日本では永谷園のお茶漬け海苔の、東海道浮世絵シリーズが有名だが、その本家があったのである。その古い膨大なシリーズの中に、きのごもあったのだ。絵は19世紀の図鑑を思わせる風情のある図柄と色調で、きのご好きならどれも欲しい。とても欲しい。このリービッチのカード類は半端な量ではなく、真面目にあつめると身上をつぶすくらい量があるのだという。たかがコレクション、でもあなどれないです。すごいです。



「南西日本菌類誌」

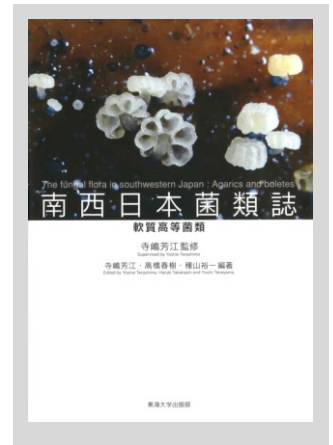
監修：寺嶋芳江，編著：寺嶋芳江・高橋春樹・種山裕一，発行所：東海大学出版部，2016年2月20日発行，350頁，ISBN：

978-4-486-02085-1, 11000円 (+税)

これもすごい。力作である。掲載種が35種なのに全部で350頁である。新種が21種、過去に新種として専門誌に発表されたものが10種、新産種4種(私が数えたので間違っているかもしれない)、うち光るきのこの新種が8種含まれている。世界的な快挙だろう。それぞれ鮮明な、普通の本ではあり得ないサイズの美しい写真で大きく・数多く掲載されており、記載された種類の幼菌・成菌の特徴がよくとらえられている。テキストは英文と和文の記載を備えている。売れて欲しい本だが、値段が値段なのできっと部数はでないだろう。だから謝辞に書いてあるように日本学術振興会の出版助成金が活用されている。自動的に手に入るものではない競争的資金なので、寺嶋先生は、沖縄と関東を何度も、完成原稿をもって往復されたはずである。出版社とのやりとりも大変だったにちがいない。とにかく、書いた人も、かかわった人も、ものすごい努力をされた本なのである。また本文中にでてくるお名前の方々(波多野ご夫妻とか)、またそうでなくても周囲の沢山の方々の、長年にわたる発見や採集品も重要な役割をはたしているはずである。

だれも文句つけようがないと思うので以下私が思うところ(まちがっていたらごめんなさい)。まず写真。写真はすばらしい。黒やグレーの背景にたたく鮮明な生の写真群はどれも素晴らしい。また詩情溢れる写真(たとえば海岸にたたくシビレタケ属の写真、255頁、など)もある。しかし顕微鏡写真以外にはスケールがはいっていない。なんで? と高橋さんに聞いたら、美しくないからだという。記載にすでにサイズは記載されているので必要ないということか。芸術なのである。うーん。でもスケールは欲しいです(特に小型の種類には)。次のような驚くべき内容もある。アキノアシナガイグチとよんでいたものがヌメリアシナガイグチとして新種記載されている(基準産地のマレーシア産の標本の分子情報がほしい)。アミヒカリタケとよんできたものがモリノアヤシビとして新種記載されている(石垣産標本だけを元に記載されているようで、他地域のものとは文献による形態比較となっている、広く西日本に分布するものとの関係が知りたい)。そしてオオシロアリタケとよんできたものがシロアリシメジという美味しそうな名称の新種となっている。

高橋さんは、関東にお住まいだったが、人生の途中で、沖縄の石垣島に移り住むようになった。そのきっかけは、山溪のムック本の沖縄特集だったのだという。そこに掲載された南国の異様な姿の未記載種の姿に魅せられたのだという。高価な本ですが盛りだくさんなので、近所の図書館用に、皆さ



ん注文しましょう。

「現代菌類学大鑑」

著者：著：David Moore・Geoffrey D. Robson・Anthony P. J. Trinci，翻訳：堀越孝雄・清水公德・白坂憲章・鈴木彰・田中尋・服部力・山中高史，発行所：共立出版(株)，2016年2月25日発行，664頁，ISBN：978-4-320-05721-0，20000円（＋税）

巨大な翻訳書である。ハードカバーで判型が大きい。重さを計ったら2kgのハカリが振り切れた。2011年に伝統ある英国菌学会の重鎮が著した本で、大学の教科書なのだという。これほどの内容の教科書があれば、ずいぶん学生も助かるにちがいない。学生どころか、菌学に携わるひとで、たとえば不明な部分について学習し直すこともできる。前にも書いたが、英語という言語はすべての人類にひらかれた言語であるとはいえ、生まれたときから英語を使う人たちの情報環境は、非英語圏の人からみると、情報量で圧倒的な差がある。でも様々なことを学ぶ必要があるのだから、たとえば翻訳されたこのような本は、ほんとうにありがたい。翻訳は京都大学農学部の故濱田稔先生が在籍された旧応用植物研究室に関連した方々が多い。伝統を感じます。翻訳の皆様の所属を拝見するにつけ、皆さんほんとうに激務をこなしながらの翻訳作業だったに違いない。ありがとうございます。おつかれさまでした。菌学にたずさわるとは、座右のリファレンスとして1冊、手元においておきましょう。

「きのこ漫画名作選」

編・解説：飯沢耕太郎，発行所：(株)Pヴァイン，2016年3月30日発行，697頁，ISBN：978-4-907276-50-8，2300円（＋税）

頁では前書をしのぐ700頁に迫る分量なのだが500gを切る重さ、軽快さが身上の漫画らしい紙質と製本である。レコードならばコンピレーション・アルバム、論文ならコレクティッド・リプリント。つげ義春「初茸がり」にはじまり、後半では、白川まり奈の『侵略円盤キノコング』も一挙掲載の大サービス。全18編のきのこ漫画が集められている。各漫画ごとに飯沢さんの簡単な背景紹介もあり、漫画文化に疎遠な方、また若い方でも大丈夫。それぞれの文化背景などについても学習できます。集めただけだ、という意見もありましたが、コレクションに似て、集めて一挙に眺めることも大切。知らない漫画だらけで、私はありがたかったです。初めて拝読した花輪さんの短編は、なんだかすごいです。好きな方は是非どうぞ。

